

台湾文学の形成：
赤松美和子著『台湾文学と文学キャンプ
——読者と作家のインタラクティブな創造空間』
(東方書店、2012年11月) に対する書評

高 橋 孝 治

台湾（国名としては「中華民国」。以下も「台湾」という）における文学はいかにして形成されてきたのであろうか。「文学」は知的創造であり、インスピレーション豊富な者が形成していったと考えてしまいがちである。しかし、こと台湾においては、「文学キャンプ（中国語原文は、「文学営」、「文芸営」）」なるもので、国策的に文学が形成されていったことを初めて学術的に明示するのが、赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ——読者と作家のインタラクティブな創造空間』（東方書店、2012年11月。以下「本書」という）である。本書によれば、文学キャンプとは、作家を講師として文学愛好者を対象とする研修合宿をいい（本書35頁）、短いものは4～5日、長いものは2年にも及ぶものである（本書37頁）。そして、本書は、戒厳令期から戒厳令解除まで連綿と続く歴史を持つ文学キャンプの分析が、台湾の文学のあり方および文学場の形成とその変容を可視化する道標になるという前提の下、戒厳令期の文学場の形成を可視化し、戒厳令解除後の台湾文学を読み解くことを目的としている（本書4頁）。本稿は、このような本書を読み解いてみたい。

本書の構成は以下の通りである。

- 序 文 台湾文学は夏に作られる
- 第一章 台湾青年の総作家化計画——救国団の文藝活動と『幼獅文芸』編集者瘧弦
- 第二章 台湾文学の夏——50年の文学キャンプ史
- 文学キャンプ体験記
- 第三章 台湾の芥川賞——『聯合報』『中国時報』二大新聞の文学賞
- 第四章 戒厳令解除後の「私たち」の台湾文学——李昂と朱天心
- 終 章 文学大国台湾の文学場形成
- 付 録 日本における台湾文学出版目録

序文では、「台湾文学は夏に作られる」という言葉で始まる（本書1頁）。本書1頁によ

れば、台湾では夏に多くの文学キャンプが開催されるという。そして、既に述べた通り「戒厳令期の文学場の形成を可視化し、戒厳令解除後の台湾文学を読み解く」という本書の研究の目的を述べる。

第一章は、戒厳令施行以降に台湾全土の青年・学生を対象とした文芸雑誌『幼獅文芸』の編集長であり、その後『聯合報』副刊の編集長、商業文芸誌『聯合文学』の創刊者である瘴弦（あげん）の編集活動から戒厳令下台湾の「文学場」の構築を検討する。その中で、戒厳令下台湾の特に高等学校において「国文」の授業で扱うのは、古典か政治家の文章であり、現代文はほとんど取り上げられることはなく（本書16頁）、中国青年反共救国団が刊行した反共イデオロギーを持つ青年雑誌などが学校を介し中高生全員に強制的に定期購読させられていたことで現代文に触れる機会が与えられていたと述べる（本書20～21頁）。これらの雑誌には、作品の投稿も可能であったという。そして、このような雑誌のうち、特に全国規模で刊行されたのが『幼獅文芸』という雑誌であったとする（24頁）。このため、例えば教科書に掲載されていなくても、台湾ではこのような雑誌を介して読者層・作家層が形成された（本書33頁）。その意味では、台湾全体で展開された『幼獅文芸』の編集長であった瘴弦は台湾文学の形成に大きな影響を与えたと言える。

第二章は、文学キャンプとは何かを概観し、その歴史的背景を考察する。文学キャンプは、主に夏期に30以上が開催され、その始まりは1955年に青年写作協会の運営により、中国青年反共救国団の夏季青年訓練活動という反共政策の一環として始まったとされている（本書35頁、49頁）。しかし、文学キャンプは、台湾独自のものというわけではなく、中国語圏では、他に中国大陆やシンガポールでも少ないながら行われていることが確認できるという（本書47頁）。また、本章では、2005年に筆者が参加したという全国台湾文学営と塩分地帯文芸営で行った参加者へのアンケートの分析なども行っている。その中では、文学や作家への興味というより参加者同士の「友達作り」を目的とした参加者もあり、文学キャンプの中で恋愛に発展した例もあるとしている（本書43頁）。また、本章のうち47頁以下は、台湾の文学キャンプの歴史について述べており、この部分が本書のタイトルからしても文学キャンプに関する先行研究がほぼ存在しない中で、最も述べたい部分なのではないかと評者は考える。既に述べたように、反共文学を台湾で生み出させるために始まった中国青年反共救国団による文学キャンプが、李登輝の台湾化政策により、継続こそしたものの著しく縮小し、台湾本土文学や反体制的な文学キャンプが始まったり、大学が高校生対象に大学の宣伝の効果を期待した文学キャンプが始まるなど、文学キャンプの変容についての記述は圧巻と言える（本文50～55頁、59頁）。

そして第二章の結論としては、「文学キャンプは、直接的には作家養成能力もなければ、経済的利益も期待できない文学活動である」（本書59頁）が、「反共のための青年教育という政治的な活動から、それぞれの『台湾』文学を標榜するための活動へとその質を変えながらも、運営費を国家資金に頼りながら、連綿と続いてきたのだ。それは、文学が、政

治を変えるものであるとの幻想が保持され、文学キャンプが、そのための教育の場として機能してきたからであり、故に政治と文学は緊密な関係にならざるを得なかったのである」と述べる（本書60頁）。

そして、本書の中ではコラム的な位置づけの「文学キャンプ体験記」では、筆者が経験した文学キャンプが日記調で生き生きと描かれている。

第三章では、台湾の文学賞について検討がなされる。国民党の遷台以降初の文学賞は、反共抗ソ文芸を提唱した中華文芸獎金委員会による文学賞であり、この賞に対する高額な賞金を目当てに反共文学ブームが起こったという（本書74頁）。しかし、国策文学を指導してきた中華文芸獎金委員会などの影響力の衰退により、台湾文学を牽引するようになったのは、台湾の新聞である『聯合報』と『中国時報』という二大新聞の副刊（文学・文化紙面）であった（本書75頁）。そして、これらの新聞は1978年にそれぞれ「聯合報小説賞」、「時報文学賞」という文学賞を創設する（本書75頁、80頁）。傾向としては、「時報文学賞」は政治的な社会批判精神を持った作品に受賞され、「聯合報小説賞」は、フェミニズム小説や同性愛小説に積極的に受賞させてきている（本書90～91頁）。そして、この二つの文学賞は、中華文芸獎金委員会以降の文学賞の穴を埋め、個人の記憶を遡及して「台湾」を語る「私たち」の文学の誕生を誘導したと言える（本書94頁）。

第四章は、戒厳令解除後の「私たち」の文学のテキストを検討している。「私たち」の文学とは、テキスト中の「私たち」を作家に限りなく近い存在とし、覇権に対抗する「私たち」の物語を描く文学である（本書96頁）。その中でも特に、李昂と朱天心に焦点を当てて、テキスト分析を行うのが本章である。特に本書117頁では朱天心の「想我眷村的兄弟們」という小説がある一文以降、それまで三人称である「彼女」と呼ばれていた者がいつの間にか「あなた」と呼び換えられることを指摘し、それまで遠い向こうにあった断片的な記憶が大切な記憶としての位置に置かれると分析している（本書117～118頁）。そして、「1980年～90年代、新聞副刊により読者が著しく大衆化した時期に、1950年代生まれの作家たちにとって、『私たち』の集団的記憶の物語として『台湾』を書くことは、実体験のみでは表すことのできない『台湾』を、相対的に捉えなおし、創造的な『語るための『台湾』を形象化』することだったのではないだろうか」とまとめる（本書126頁）。

そして終章では、「戒厳令期（1949～87年）における文学教育は、中華人民共和国に対抗する反共教育の一環として展開されたため、国家規模で行われ」（本書127頁）、それを実行するために文学キャンプが始まり、「文学キャンプが文学活動として規範化されていた」ため、戒厳令解除後、反体制文学などについても文学キャンプが行われていると結論づける（本書128）。特に、「文学あるところに文学キャンプありきとの幻想は、本来、反共から始まった文学キャンプを、新しい文学潮流を掲げる文学者たちが当然のものとして行うべき文学活動へと展開させた」との表現でこれを述べる（本書128頁）。さらに「戒厳令期の文学教育を受けて育った作家たちが戒厳令解除後に真っ先に発表した作品は、中

華民国という『大きな物語』の終焉に対して『私』個人の記憶を語る『小さな物語』ではなかった。中華民国という『大きな物語』に対抗し、本土派、外省人二世帯、女性などそれぞれの立場から『私たち』という集団的アイデンティティを作り上げようとする『大きな「台湾」物語』であったのだ、「文学キャンプという作家と読者が互いに顔を合わせる文学活動の普及と50年以上の継続は、日本における俳句・短歌の世界のような、創作者と読者、創作者と批評家などの間に緊密な関係を生み出すきっかけともなり、後のインターネット文学の隆盛にも見られるようなインタラクティブな広がりを持つ台湾独特の文学場を形成するに至ったのではないだろうか」と述べて本文は終わる（本書128頁）。

そして、付録として「日本における台湾文学出版目録」が付いて本書は幕を閉じる。

本書は、台湾文学の形成がまず国民党政府の国策として文芸誌の刊行、文学キャンプの開始、文学賞の創設などが行われるも、「文学あるところに文学キャンプありきとの幻想」が台湾に生まれたために、戒厳令が解除され、国策文学を生み出す必要がなくなった後も、文学キャンプが継続していると指摘する。この台湾文学の始まりを本書で知った時、評者がまず思い浮かべたのは、中華人民共和国（以下「中国」という）で中国共産党統治下における漫画に対する以下の指摘である。「漫画は一種の風刺性、ユーモア性を備えている絵画である。漫画家は、政治や日常生活の中から題材を選び、誇張、比喩、象徴、寓意などの手法を用いながら、ユーモアのある描写で表現し、その際、人物や物事に対して風刺、批判あるいは賞賛の意味を含ませる。それは、政治闘争と思想闘争の一種の道具である」¹。これはすなわち、中国大陸（現在、中国共産党が実効支配している領域を意味する）においては、少なくとも漫画は政治的な表現をするものと位置付けられているということであり、この点、本書が指摘する戒厳令解除前の台湾文学と似た位置づけと言える。評者は、中国共産党統治と戒厳令下台湾ではその統治方法に類似性を見ることができると述べたことがある²。しかし、統治手法にとどまらず、中国共産党統治下の漫画と戒厳令下台湾の文学にも類似性があるということである。ここに漫画と文学という差はあれど、何らかの表現物という点では共通していると言える。特に本書48頁が引用している中国青年写作協会設立の理由である「文芸は無意識のうちに人々を感化する力と偉大な宣伝能力を備えている」との言葉は、中国共産党統治下の表現物にも当てはまるであろう。このような、中国共産党統治下との類似性を指摘すると本書では触れられていないものの、以下のような疑問がわいてくる。

1 陶治『中国の風刺漫画』白帝社、2007年、1頁。

2 高橋孝治「1950年代台湾の法思想」『ふくい地域経済研究』（25号）福井県立大学地域経済研究所、2017年、62頁。

①中国共産党統治下でも表現物は国策的な面が強くあるにもかかわらず、なぜ中国では文学キャンプのような国策文学を生み出させるためのシステムが大きく育たなかったのだろうか。中国においても文学キャンプは存在するものの本書47頁で紹介している中国の文学キャンプは、最も古いもので1995年から開催されている全国草原文学夏令営である。しかも、こちらは「直接的な文学活動は行われていない」と述べられているし、文学キャンプは、「いずれにしても中国ではそれほど盛んな活動であるとは考えられていない」とまとめる（本書47頁）。本書は、台湾文学を主題としているため、直接本書が検討するべきテーマではないものの、この差異はやはり気になる。すぐに考え付く回答としては、プロレタリア文化大革命など知識階級が批判の対象となる時代があり、作家＝知識階級であると考えれば、文学キャンプなどは開催できないとの判断があったのかもしれない。

②中国においては、中国共産党の施策を宣伝するツールとしては、特に1950年5月1日に中国で施行された婚姻法については、読物や漫画、連環画、幻燈、歌曲、展覧会などを通じて宣伝を行っていた³。逆に台湾では文学以外に対しては国策的作品を生み出させるためのイベントはないのであろうか。この点、本書はやはり「台湾文学」を主題としており、直接検討すべき内容ではないものの、この点評者は気になった。

③中国においては、現在も体制批判の文学の発表は許されないものの、外国などで発表されていることがある⁴。台湾においても文学キャンプとは関係のないところで、戒厳令により弾圧された文学や、弾圧されても作品発表を続けようとした作家などはいなかったのであろうか。

これらの点は、今後誰かが明らかにする必要はあるであろう。

さて、本書第四章は、戒厳令解除後の「私たち」の文学のテキスト分析となっていることは既に述べたが、次に本書のテキスト分析を試みたい。というのも、残念なことに本書のテキストにはやや一体感が見られない。本書では「日本人研究者は誰も知らなかった」（本書2頁）、「そうだ、文学キャンプに行こう」（本書3頁）、「お布団持参」（本書62頁）などの口語表現が多くなされている。評者は、本書を読み始めたとき、これらの表現から、本書は研究書としての形式は保ちつつ、多くの者に読みやすい新書などで用いられている表現を多用しているものと考えた。しかし、本書第三章あたりから「研究書らしい」表現が目立ち、新書の表現に慣れて読み進めていると急激に違和感を感じるようになる。評者の分析では、本書74頁の「国民党遷台以降の最初の文学賞は、反共抗ソ文芸を提唱した中華文芸獎金委員会の文学賞である。張道藩の指導の下、1950年3月1日に成立した」

3 黒田三郎『婚姻法の近代化——アジアの現代家族法——』頸草書房、1966年、255頁。

4 例えば、劉曉波「〈詩〉天安門事件——墳墓からの叫び」劉曉波（横澤泰夫＝及川淳子〔ほか〕（訳）、劉燕子（編））『天安門事件から「08憲章」へ——中国民主化のための闘いと希望』藤原書店、2009年、25～57頁収録など。

という表現が、前半部分最後の口語表現ではないだろうか。この表現の後段の一文のみでは、何が1950年3月1日に成立したのか分からない。前段の一文と組み合わせても、文学賞が成立した日なのか、中華文芸獎金委員会が成立した日なのかも判断できない（少なくとも評者は初見時には読解できなかった）。このため、この部分は文章のニュアンスからも読み解かなければならず、口語表現であると言える。なお、別の研究によれば、1950年3月1日に中華文芸獎金委員会が成立し、同時に文学賞も創設されたということのようである⁵。この表現以降は、口語表現は基本的に見られなくなるものの、本文のほぼ最後の部分である第四章の最後で再び「ならなかったのだ」という口語表現や（本書126頁）、本文の最後で「あたかも戦後台湾独自の制度である文学キャンプのように」との体言止めという口語表現が用いられている（本書129頁）。

本書第四章は、テキストの変化につき記憶の位置づけの変化と分析しているが、評者は本書のテキストの変化は筆者の専門性と読者への配慮なのではないかと考える。本書i頁以下には、藤井省三による「推薦の言葉」も掲載されている。その中で、「『戒嚴令』やら『救国団』やらといった政治ターム」が耳目を驚かした側面があることを述べている（本書i頁）。確かに本書第四章は「文学の研究」であるが、それ以外の部分は台湾政治史としての側面が色濃くなっている。筆者の専門は「文学」であり、あまり慣れていない台湾政治史的な内容の部分について執筆する際には一般的に読みやすい表現を用いること（すなわち、「口語表現」）を心掛けたものの、専門分野である「文学」を論じる際には口語表現を用いることを失念し、書き慣れている「論文的な文章」で執筆してしまったのではないかと評者は考える。そして、文学を論じ終わり、まとめに入る際にはやはり政治的内容が入ってきているため再び口語表現を用いたのではないだろうか。

後半は本書の揚げ足取りのような指摘を行った。しかし、本書が台湾文学の形成について、引き込まれるほどの興味深い指摘、調査がなされているからこそ、テキスト表現の変化が評者は気になってしまった。しかし、これは本書の価値を大きく下げるものではない。台湾文学の形成について、戒嚴令下という統制の強い時代の台湾文学界のニオイすらも伝えてくれる本書は台湾に興味のある人には是非一読をお薦めしたい一冊である。

赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ——読者と作家のインタラクティブな創造空間』
東方書店 3,200円+税 全189頁 2012年11月出版

(TAKAHASHI Koji)

5 和田和久「1950年代の台湾文学——金溟若『石教授』を読む」『GLOCAL』（13号）中部大学大学院国際人間学研究科、2018年、10頁。